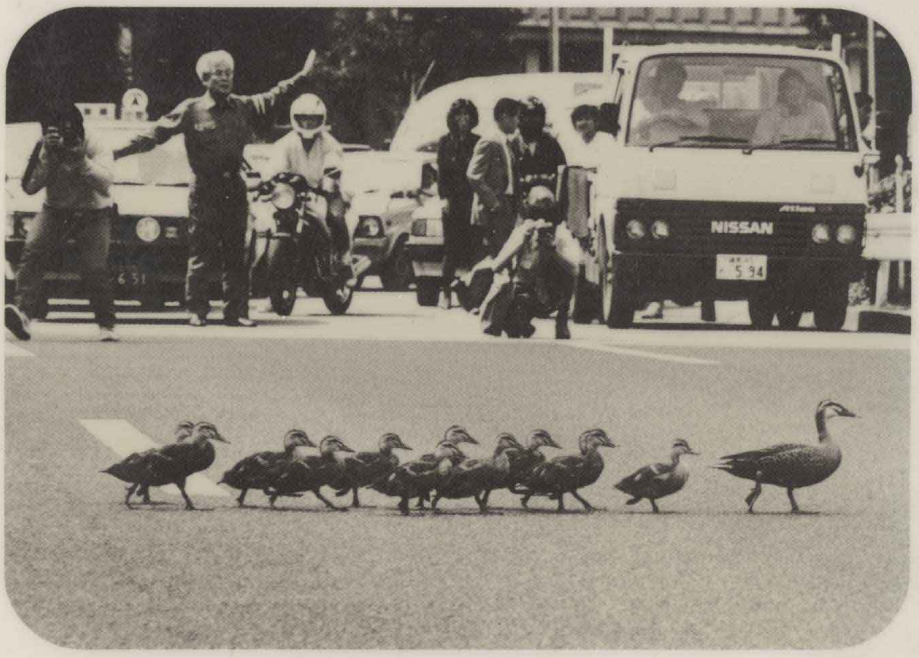
Mommy Duck & Her Ducklings

カルガモ一家の愛情物語

東京新聞 写真部



Mommy Duck & Her Ducklings

カルガモ一家の愛情物語

東京新聞 写真部

カルガモ一家の愛情物語

1986年6月3日　第1版第1刷発行

著　者　東京新聞　写真部
発行者　江　口　克　彦
発行所　P H P 研 究 所
東京事務所　〒102　千代田区三番町3-10
☎03(239)6221
京都本部　〒601　京都市南区西九条北ノ内町11　☎075(681)4431

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社宮本製本所

©TOKYOSHINBUN SHASHINBU 1986 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。
ISBN4-569-21778-8

カルガモ一家の愛情物語

目　次

カルガモたちとの出会い

I 春ふたたび（三月二十八日～六月七日）

ドラマの幕開け――14

ヒナ誕生、みんなで十二羽――20

新名所になった人工池――40

わんぱく子ガモ――53

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

II 都心の人気者（六月八日～六月十五日）
落とし穴――64
がんばれ〝チビ〟――75
カルガモ・フィーバー――93
III 引っ越しのとき（六月十六日）
IV 新しい生活（六月十七日～七月十三日）

悲しすぎる洗礼――128
奇跡の生還――145
ついてない取材――154
今日もお濠に異状なし――162

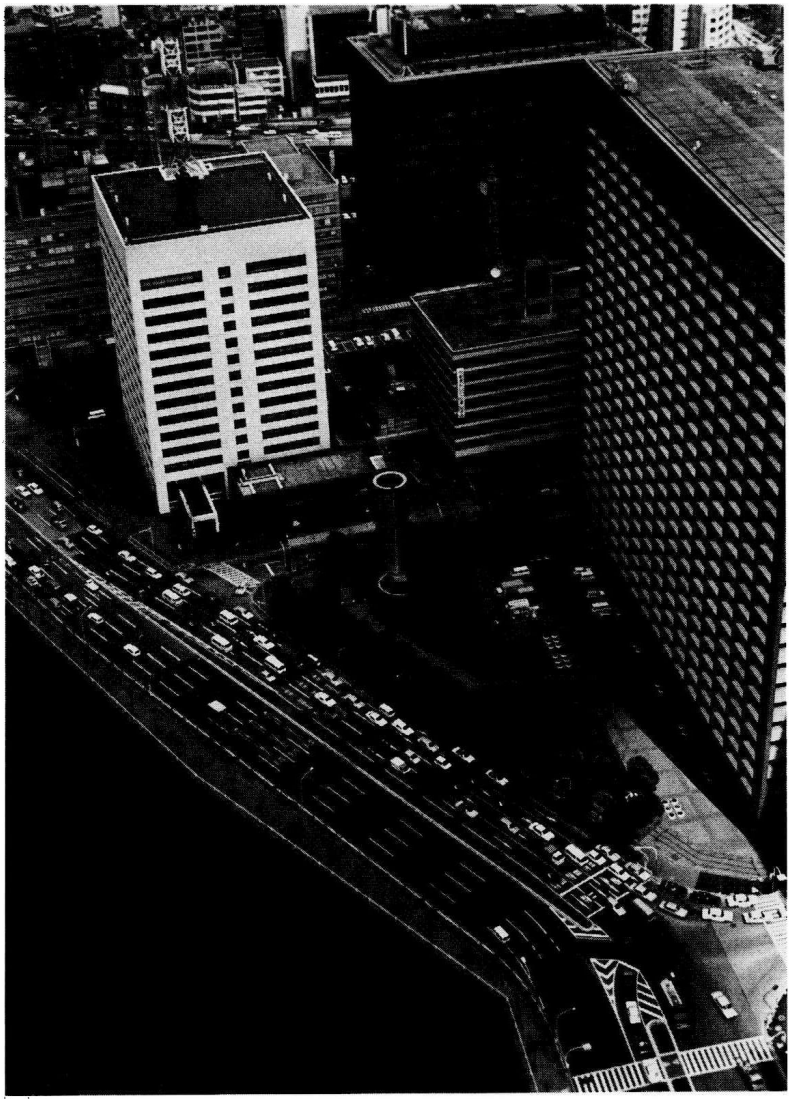
V

旅立ちの夏（七月十四日～九月十一日）

いよいよ、空へ――180

チビ、ひとりぼっち――191
誰もいなくなった大手濠――208
おわりに
東京新聞　編集局写真部氏名一覧

装幀――上田晃郷



人工池全景

カルガモたちとの出会い

私が仕事をするデスクの片隅に一枚の写真が忘れられたように貼りつけられている。アスファルト道路の僅かな亀裂から、春の草が芽を出しているスナップ。歩道がかすかに揺れるかげろうの向こうに、新入社員らしいＯＬの顔が明るい。

もう色あせてはいるが、都会の中で息づいている小さな自然がここに表現されている。これを撮って来たときのちょっと得意げなＴ君の顔が忘れられない。

「東京のど真ん中に、こんな春がありました。できたら使って欲しいんですが」

しかしこの写真は、その日大きな事件があったために紙面を飾ることはできなかった。

新聞社の写真部の仕事は、事件の現場に駆けつけることだけではない。季節が少し動いたなと、出勤途中のサラリーマンが感じるころ、その微妙な変化を自然の中から捜し出して一枚の写真に収め、紙面に彩りを添えることもまた重要な仕事の一つである。

私がデスクの仕事を担当するようになって、いつも感じていたのは、その一枚のスナップ写真がどうしてもマンネリになりがちなことだった。都会の中の自然を新鮮な角度から切り取ってみたい、東京の中にこそわたしたちが見落としている自然があるのではないか、あるいは人工化が進む街なかで〝新しい自然〟が育っているのではないか――いつもそんなことを考え続けていた。

朝四時ごろから出勤前のひととき、東京の街をさまよい歩いた時期がある。

まず驚いたのは、名も知らぬ鳥が意外に多く住みついていることだった。自然環境の移り変わりに敏感に反応するのが鳥たちであることに気づいた。羽を持つ鳥たちは、自由に空を舞いながら、自らが住める適当な環境を選択している。東京の自然を見直すのには、鳥のことを調べるのも一つの方法かもしれない――そんな気がした。

野性動物を撮り続けている久保敬親さんを訪ね、鳥の一般的常識から、撮影の方法まで手ほどきを受けた。野鳥の会の探鳥会にも参加し、新宿御苑、神宮の森、大井野鳥公園などに足繁く通う日が続いた。

そんなとき、東京のオフィスの中心街、大手町の商社の前にある人工池でカルガモのヒナがかえったという話を耳にした。カルガモか――とそのときは聞きながしてしまったような気がする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本では北海道から九州まで、高地以外、どこでも見られる留鳥（渡り鳥ではない）で、注意していれば市街地の池や堀でも見られるごくありふれた鳥だ。ただ気になったのは、コンクリートの小さな池の中でヒナにかえったカモたちが、一体どんな生活をしながら成長していくのか、本当に空を飛ぶあのカモになれるのだろうかということだった。勤務時間の合い間を縫って、人工池に通いだしたのがちょうどこのころ、昭和五十八年の春である。

カルガモ親子が人工池から、突然、姿を消したのは、二カ月くらい経ったころだった。いつものように池をのぞくと、前日までいたはずのカモが見当たらない。ネコにでもやられてしまったのか。必死に捜しているうちに、一〇〇メートルほど先の皇居のお濠で一家を発見した。――この車の流れの激しい広い道をどうやって……。

二日後、また彼らを見失ってしまう。広い大手濠を隈なく捜して歩いた。あきらめて引き上げようとしたとき、隣の和田倉濠の方に何気なく目をやった。そこに、いたのである。とすると彼らは再び六車線の内堀通りを横断したことになる。一体いつ、どんな様子で……。

動物の写真は簡単に撮れるものではない。彼等が行動を開始する夜明けから、かたときも目を離さずに追いかけるしかないことを思い知らされた。

カルガモにとりつかれたのはこの時からである。

二年目の春は、写真部員の中で鳥などに興味をもっている人たちにも呼びかけ、時間を割いて

は人工池通いを続けた。この池の端に建つ高さ六メートル程の排気筒の上でかえったヒナたちが、石ころが落ちるように池の中に飛び込むところから取材は始まった。

このときも話題になったのは、やはり人工池からお濠への「引っ越し」だったが、わたしたちが出会ったドラマは、お濠に移ってからの方がむしろ多かった。やがて大空へ向かってはばたく日のための訓練は厳しかった。母ガモの子ガモに対するしつけは、ときにわたしたちの胸をしめつけるほどだった。ほんの小さな舞台で繰り広げられる、生き抜くための闘いは、そのまま大自然のものだった。お濠に住むスッポンや雷魚、青大将などに敢然と立ち向かう母親、それを身じろぎもせずに見守る子ガモたち。そして何者かによって五羽の子ガモは生命を落としてしまう。すべてはわたしたちが初めて体験する〝東京の自然〟だった。

この年、カルガモ一家の一連の報道は高く評価され、東京写真記者協会企画部門賞を受賞した。

三年目の昭和六十年は、吉武写真部長の励ましもあって、写真部員全員がカルガモ取材に関わることになった。

ここにいまあるのは、その記録である。

一人の部員が朝四時に現場に〝出勤〟する。やがて交代の者がくる。観察していた時間内に、カルガモ一家はどんな動きをしたか、次の人にバトンタッチするときの置き手紙のようなもの

だ。だから決して名文ではない。しかし、写真部員が目撃したすべてがある。

カルガモ一家が見せてくれた営みは、多分、自然の法則に沿ったまでのことだったろうと思う。しかし人は自らの生き方と照らし合わせ、それぞれのドラマを組み立て、そして彼らのけなげな姿に拍手を送り続けた。

この一連の報道に対して寄せられた予想外の反響の大きさにわたしたちは逆に日本の〝いま〟を見たような気がする。これもまた大きな収穫の一つである。

鍔山英次

I

春ふたたび

ドラマの幕開け

三月二十八日（木）

久しぶりに東京・大手町の三井物産本社（以下物産と略）ビル前の人工池をのぞいてみた。昨年夏、カルガモ一家の旅立ちを見送ってもう半年経ったことになる。もし今年もここでカルガモのヒナがかえるとすれば、もうそろそろ親ガモたちが姿を見せる頃だろうと、気になっていたところだった。

来てみてよかった。排気筒の下で仲むつまじく泳いでいるカルガモのツガイをみつけた。昨年以上にきっちりした取材をしたいが、しばらくは遠くから観察を続けよう。

それにしても今年はどこでタマゴを産むのだろうか。昨年は池の西側にある排気筒でビルの清掃員が偶然タマゴを発見した。もしこの排気筒上が産卵の場所になるとしたら、まず問題になるのは、かえったヒナたちが池に飛び降りる瞬間をどう捉えるかだ。写真取材のスタートはここか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com